



共立研究

東京基督教大学 共立基督教研究所

〒270-13
千葉県印西市内野3丁目301-5-3
TEL. 0476(46)1131(代表)
FAX. 0476(46)1405

Vol. II No. 2 1996年7月1日

連載

現代のキリスト教哲学(3)

稻垣 久和

研究会議議長／東京基督教大学教授

ヘンドリック・ヘルツエマ(アムステルダム自由大学教授)の論文「認識の歴史的性質」の翻訳完結とその補足説明

[承前]

4.評価

ドーイヴェールト哲学の説明を終えるにあたり、ここで以下に私自身の彼の哲学に対する賛同と同時に批判を含めた意見を四点にまとめて記してみる。ただし論点を超越論的批判の構造という点にのみ限定することとする。ただ、その超越論的批判の構造こそがまさにドーイヴェールトのキリスト教哲学の概念と方法論の中心にあったことなのである。

①ドーイヴェールト哲学の第一義的な意図に関しては、私は心から賛同する。また、“内的改革”がキリスト者自身の哲学研究に際して絶えず目指さねばならない目標であるということも確信している。キリスト者は基本的な意味において、特に今の時代には他の時代にも増して、全人類とともに思惟共同体の中に立たされている。キリスト者が自分たちに向かって語られていることを知っている御言葉、また一つの挑戦をもって委ねられているその御言葉は、創造主の意志に反して進行しようとしているあらゆる事柄—そしてそれらの事柄は救済の手段となってしまう可能性を秘めているのだから—に対して福音の



TCU キャンパス風景

呼びかけをもって“否”を宣言しているのである。それらは高尚な御言葉なのであるが、いとも安直に誤解されやすいものである。この約束と結びついた福音の召命なしにはキリスト者の生は存在し得ない。しかしこれらはいわゆる勝利主義(triomfalisme)とはまったく無縁である。

②理論的思惟の構造の分析に関して言えば、それはドーイヴェールトが期待したような成果をもたらさなかった。その分析は彼の弟子たちのみならず、それ以外のグループの人々の間でも様々な疑問を呼び起

目次

- * 連載「現代のキリスト教哲学(3)」 稲垣久和
- * キリスト教と日本文化研究センター近況
- * ニューエイジ—古代異端の再来— ピーター・ジョンズ著・櫻井闇郎訳
- * 新所員紹介 * 所員近況

すこととなつた。⁽³¹⁾ すべての理論的思惟が前理論的思惟から出発していることを示すという考え方は、たとえそれになんらかの価値があるとしても、理論的思惟の超越論的批判という議論の出発点としては決してよい方法ではない。それは彼が自信をもって超越論的批判の“第一の方法”と名付けたにもかかわらず、初期の頃の（オランダ語版で展開された）超越論的批判一哲学とは時間内の実在が意味の全体に向かいかつ自己自身に向かうという見方よりもかえって受け入れにくいものとなってしまっている。いずれにせよ、両方の超越論的批判に共通していることは以下のことである。つまり人間の思惟は、たとえそれが理論的なものであったとしても、その人間自身から、その人間の人格的統一から、その人間の自己理解から切り離しては評価し得ないという事実、またこの自己理解は起源についての確固たる信念から切り離し得ないという事実に注目しているということである。⁽³²⁾

③実在の宗教的次元という概念の中での統一性と多様性の問題もまたいくつかの疑問を呼び起こすこととなつた。それは人間経験に関連して、多様な次元について語ることにより、より明瞭にさせられ得る。そして様態的（機能的）構造と個別的（全体的）構造の間の区別が確かに本質的重要性を持っている。⁽³³⁾ また、人間経験のパースペクティブ性をもった構造という理念とそれに関連づけられた三重の超越論的根本理念（つまり実在の経験に対する整合性と多様性の概念、人間の人格性の統一の理念、創造の起源についての確固たる信念、この三つの基本的に重要な理念）が結び付けられている。しかし私は、この人間の人格性の統一ということが、なぜ神と関連づけられた被造的実在それ自体の中心的事柄でなければならぬのか、その理由が分からぬ。⁽³⁴⁾ 人間は創造された実在全体の中で独自の場所を占めており、その場所において構造的に全体と関係づけられているということは、まったくその通りであろう。そしてそこにおけるドーイヴェールトの主体一客体機能による構造分析は、確かに興味深い視点を提供している。⁽³⁵⁾ しかし、だからと言って、地上的な実在が、造られた実在それ自体として立たしめられた時に、その統一を人間の中に見いださなければならぬ、またこの道に沿って意味の全体として起源に関係づけら

れる、というところまでは言えないのではないか。人間の理解に関しての実り多い彼の理論が、ここにおいては実在それ自体の理解に適切でない形で応用されている。私の考えでは、造られた実在（の主体の側面）の統一は人間の中にはないし、アダムの中にも、キリストの人性の中にもない。それは創造なる神との関係それ自体の中にある。その関係は確かにイエス・キリストと切り離せないし、また神がキリストにおいてご自身を啓示したこととも切り離せない（コロサイ1：16－17、ヨハネ1：1以下）。また愛という中心的戒めにおける律法の統一と切り離すこともできない、といった言明も正しい。⁽³⁶⁾ しかしながら、このような信仰の理解を様態的（そして個々の）多様性の上にある超様態的統一という理論的問題への回答として採用することはできないのである。

私が一番理解に苦しむ点は、ドーイヴェールトが宗教的統一という考え方（創造の新しい宗教的根源としてのキリストを分け持つ人間の心ないしは自我）を理論的思惟における統合といった抽象的問題を解決するために使うことである。われわれの経験の論理的局面と非論理的諸局面の間の“純粋志向的”対立と彼が呼ぶものが、最終的にはキリストにおいて見いだされる宗教的統一から解決されている。どう見てもこのことを正当化できるとは思えない。一般的に言って、ドーイヴェールトは聖書の教えと哲学的問題を直接に結び付けることを拒否しているのに、哲学的思惟の宗教的前提についての理解という点ではそれを行っている。そのことは私にとってまったく納得がいかない。ここにおいて構造的統一と多様性の（理論的）問題と、実在と思惟の宗教的定義の問題とが余りに性急に結び付けられてしまっている。⁽³⁷⁾ この章の第3節（翻訳では省略）において私はドーイヴェールトの思惟のもう一つの基本的発想に依拠しつつ別の解決法を示してみたい。それは法と主体の間の関係というテーマに沿ったアプローチであり、私の言葉では実在の応答責任性ということである。

④ドーイヴェールトが歴史主義の問題、すなわち認識の歴史的性格と思惟共同体の統一という問題に対して与えた回答は、私の考えでは、この問題を解決するにあたっての根本的要素を含んでいる。ドー

イヴェールトの回答は以下の四つに区分できよう。

- (a) 歴史的、文化的多様性の全面的承認。
- (b) この多様性を超越した人間性の統一という理念。
- (c) 人間性の内における根底的な対立の承認。それはまず第一に人間性の宗教的判断の中に、第二にそれに基づいて文化の多様性全体の中に存在している。⁽³⁸⁾

- (d) 創造の構造原理として存在を可能にしている構造的境界の概念、および、そこにおける理性的行為とそれがもたらす結果。これらの構造についてのわれわれの認識それ自体もまたある歴史的に決定された性格を帯びている、ということも同時に加えられねばならない。⁽³⁹⁾ それは決して有効性を失うことはないであろう。

以上のドーイヴェールト哲学の四つの要素は歴史主義への回答として重要であるのみならず、キリスト教哲学それ自体に対しても基本的に重要な意味を持っているのである。

[*Het Menselijk Karakter van Ons Kennen* 『認識の人間学的性格』の第4章第2節の翻訳完結]

ヘルツェマによる以上のような

ドーイヴェールト哲学の評価が出版されたのは1992年であった。彼はさらに1994年8月22日から26日にかけて開催された「第5回カルヴァン主義哲学国際シンポジウム」⁽⁴⁰⁾における主題公演「理論的思惟の超越論的批判による哲学と科学の内的改革」においてより明瞭にドーイヴェールト哲学の評価と批判を行なった。

以下で同シンポジウムにおけるヘルツェマの論旨の要点を紹介することにする。

* * *

ドーイヴェールトは「起源」、「多様性」、「統一」の三つの宇宙法理念 (*wetsidee*) を後になって超越論的根本理念 (*tarnscendentale grondidee*) と呼び換える、さらに宗教的根本動因と結び付ける。宗教的根本動因 (聖書的動因、背神的動因、その二つの統

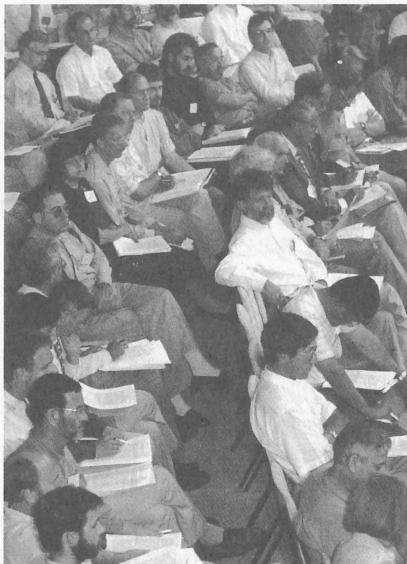
合の動因) が人間の心に働いて、超越論的根本理念の内容を規定する。宗教的根本動因が超越論的根本理念を通して思惟の方向性を決定するのである。つまり超越論的根本理念が宗教的領域と理論的思惟 (科学) との間の内的接触点となる。「内的改革」は聖書的動因に導かれ、次の三つの超越論的根本理念によって表現される。つまり神的起源、キリストにある統一 (そこにおいてわれわれは再生した心を共有している)、時間内の整合性と多様性、この三つである。そしてこの内的改革はまずは哲学に適用され、さらに諸科学に適用されていく。

超越論的批判とは何かといえば、それは宗教的出発点が理論的思惟を決定している、ということを示すことである。つまり宗教的に決定された超越論的根本理念が理論的思惟の必要条件となっていることを示すことである。

また「統一」の意味も後になって彼の哲学の発展の中で少し変更が加えられている。最初は多様性の「統一」であったものが後になって論理的局面と非論理的諸局面の間の対立の「統一」へと変わっていく。しかし後者の場合も最終的には人間の心の統一ないしは (宇宙論的な意味で) キリストにある統一であることに変わりはない。

評価

以上のようなドーイヴェールトの超越論的批判は哲学において大きな貢献をしたし、また今後もしうると考えられる。それは特に以下の三点においてである。①様態的構造の理論。これは実在における多様性と整合性を細部にわたって議論していく際の指針を与える。②様態的構造と個物の構造の区別。これらは理論的思惟と具体的経験の区別に関係しているが、これらの区別は第一の点と共に科学的探究の可能性と限界づけにとって重要であろう。③法と主体の根本的重要性。これは特に古典的合理主義や現代的主觀主義に対抗して創造に関する聖書的信仰の包括的性格を表現するための基本的枠組を与えていく。



「第5回カルヴァン主義哲学国際シンポジウム」風景
改革主義哲学協会誌 “Beweging” (1994. 10) より

しかしながら、当初、ドーイヴェールトが予想していたようなキリスト教のサークル以外の哲学学派との対話はあまり成功しなかった。また現代哲学の発展の中で理論的思惟の中立性否定や科学における還元主義否定のような発想が出てきたとしても、それは必ずしもドーイヴェールトが主張するような超越論的批判との関係で出てきたわけではない。さらにドーイヴェールトの方法は哲学はともかくとして、諸科学において十分に具体的な研究指針を与えることができなかった。彼の方法を現時点で正しく評価し、そこから次のステップを踏むことをを目指さなければならない。以下で三点に注目しよう。

(1) ドーイヴェールトは超越論的根本理念の必要性と、宗教的立場の選択とについて議論を尽している。ところがこの議論は大層抽象的であるだけではなく、議論する前から様態局面の理論を前提としている。しかも必ずしも議論が十分に説得的ではない。事実、後になって採用された超越論的批判の方法（論理的局面と非論理的局面の間の対立）は、ドーイヴェールトが最初の方法より自信をもっていた議論であったにもかかわらず、逆に多くの批判を受けてきた。ここでは特に二点のみを挙げてみる。

- (a) ドーイヴェールトは理論的思惟を可能にする超越論的条件と超越的条件を区別しているが、実際の語の使用法としてこの二つを混同している。前者は理念と関係しているが後者はその理念が指示しているものと関係している。つまり神、心における人間の統一とすべての実在の新しい宗教的根源としてのキリスト、宇宙時間における多様性と整合性、この三つと関係している。ドーイヴェールトが実際に議論しているのは超越的条件の必要性の方であるが、彼の結論を見るとそれがたかも超越論的条件であるかのように語られている。
- (b) 論理的局面と非論理的局面の間の結合、すなわち理論的思惟の概念化を可能にすべき対立物の結合はこの両方の局面を超越する自我によってのみ確立されうる、と彼は言う。ここでもまた中心的統一の理念が基本的役割を果たす。起源の理念が必要とされるのは、この統一が与えられうる自己それ自身ではなく、自己知識の方を通してである、とドーイヴェールトは言う。しかしこの中心的統一の理念を基礎にして、いかにこの論理的局面

面と非論理的局面の間の結合が思惟の中で達成されうるのかがはっきり語られていない。『理論的思惟の新批判』の中の認識論について論じている部分において、ドーイヴェールト自身はこの結合の可能性の条件として宇宙時間の連続性とともにその時間に基礎を置いた理論的直觀について述べている。しかし宇宙時間という考え方は極めて抽象的に過ぎるし、アプローチ全体に見え隠れする新カント派的思考方法にも問題がある。

(2) 実はそれ以上に重要なことがある。超越論的批判は起源、統一、多様性における整合性という三つの超越論的根本理念によって決定される。それはドーイヴェールトの宗教の見方に依存している。もしこの宗教の見方が維持されるのであれば、超越論的批判もまた本質的に維持されるであろう。ところが、問題はこの宗教の見方が正しいものかどうか、ということである。

ドーイヴェールトの宗教の見方は、人間のその心における統一とすべての実在のキリストにおける統一、という彼の“発見”に密接に関係している。被造物の創造者へのつながりは統一と多様性というテーマと深く関係している。それは中心的統一から湧き出る運動でありかつ統一に集中していく運動である。またその統一は、起源の神的充実についての被造物の表現ともなっていく。しかしこのようなドーイヴェールトの考え方にはいくつかの反論が可能である。三点ほど挙げてみよう。

- (a) まずこのような物の見方は聖書的であろうか。もちろんドーイヴェールト自身はそのように主張し続けてはいたが、必ずしもそのことが十分に検証されたわけではない。ドーイヴェールトに従えば、その事は中心的宗教的意味で理解されうるところの御言葉の中心的啓示に属している。確かに、あらゆる二元論を排し、人間のその心において中心的統一があるという見方は、人間にに対する見方として聖書的基礎をもっている。また、すべての創造された実在のキリストにある統一ということが新約聖書の教えの中に含まれているということも明らかである。しかし、その二つを結び付けるというドーイヴェールトの考えは聖書によつては確かめられない。また、論理的局面と非論理的局面が統一されるという抽象的かつ論理的問

題がキリストに結び付けられるということも聖書に言われていることではない。人間が被造世界全体の中心であるという発想も同じく聖書的ではない。

(b) ドーイヴェールトの宗教と信仰の区別もはっきりしない。宗教は根源的な事柄であり、信仰は様態的な事柄であるが、その区別は彼の全体の理論が説明されなければ説明不可能である。

(c) 具体的な信仰と抽象的な宗教の間の区別は分りにくい。宗教の概念が高度に抽象的であるために、信者にとっても非信者にとっても、宗教的動因が絶対的起源を指示す統一と多様性の動因であることがつかみにくい。現代は特に価値が断片化してしまった時代であるだけに一層そうである。

(3) 最後に、全体としてドーイヴェールトの哲学は抽象度が高過ぎることが指摘されるであろう。学問性が増した分だけ、カイパー流のキリスト教世界観の議論より抽象的になってしまった。しかし、実際にキリスト教信仰と文化とが対立するのは世界観のレベルである。例えば科学が信仰と対立するのはそれが自然主義という世界観を掲げるからである。ドーイヴェールト哲学はもっと具体的なキリスト教世界観のレベルで展開されていく必要があるであろう。

以上がヘルツェマによるドーイヴェールト哲学批判の骨子である。彼は同哲学を批判的に超克するために三つの提案をする。まず第一に、宗教というものを創造主に対する応答責任として捕らえるようにする。そうすれば議論はより具体的になる。また人間は宇宙論的に被造世界の中心になる必要はないし、統一が超時間的なキリストにある心と結び付けられる必要もない。統一は被造世界自身の関係性の中に、またイエス・キリスト自身の中にある。もちろん聖書的な人間論としては、人間は多様に織りなされた構造をその心において統一しており、それゆえにすべての二元論は排されている。第二番目に、哲学は神学との対話をもっと積極的に行なうべきであろう。神学は聖書についてまた信仰について色々議論しているのであるから、逆に、神学もまた現代の知的な潮流にもっと関心を持つべきである。第三番目に、ドーイヴェールトの時代には論争の相手が新カント派であり、したがって超越論的方法が大きなテーマ

となっていた。しかし現代ではその方法はすでにすたれている。むしろ現代の解釈学の行き方を参考にしつつ、哲学の方法としては対話と自己理解を中心とすべきであろう。

* * *

1994年8月のシンポジウムにおけるヘルツェマの議論は以上である。期せずして筆者としては、ちょうど彼の最後の部分の提案の第三番目の方向に自らのアプローチを進めることになった。すなわち筆者自身の方法は「超越論的解釈学」(『知と信の構造』1993年)と呼んでいるものだからである。20世紀末の西欧哲学の潮流と対話できる形でドーイヴェールト哲学の精神を継承しようとすれば、解釈学的アプローチを十分考慮しなければならない。しかもそれは、神による創造、人間の墮罪、イエス・キリストによる聖霊の交わりを通しての贖罪といったキリスト教の宗教的根本動因に促されたものである。かつての神の創造の法の“適用”を重視することが、ちょうど「理解」における具体的な“適用”を強調した現代の解釈学の精神とも重なっていくのである。

もう一つの点は、宗教的根本動因ないし“宗教”が何を意味しているかということであるが、この点においてわれわれは西欧のキリスト教哲学がほとんど考慮していない東洋宗教とキリスト教との関係についての取り組みを同時にいかねばならないであろう。このようなアプローチによって他の諸思想および諸科学との対話を進めようとするのが筆者(稻垣)のキリスト教哲学の行き方なのである。(完)

31. Vgl. voor een overzicht daarvan: D.F.M.Strauss, An analysis of the structure of analysis. In: *Phil. Ref.* 49 (1984), p. 35 - 56; H.Hart; Dooyeweerd's Gegenstand Theory of Theory. In: C.T.McIntire ed., *The legacy of Herman Dooyeweerd*. Lanham : University Press of America, 1985, p.143 - 166.
32. In dit opzicht is er overeenkomst met de analyse van Michael Polanyi in zijn boek *Personal knowledge*. New York : Harper & Row, 1964.
33. Vgl. hoofdstuk 2.
34. Vgl. J.D. Dengerink, Mens, kosmos, tijdelijkheid, eeuwigheid. N.a.v. W.J.Ouweneel, *De leer van de mens*. In: *Phil. Ref.* 54 (1989), p.83 - 102, spec. p.85v.
35. Vgl. hoofdstuk 2 en 3.
36. Vgl. hoofdstuk 3.
37. Vgl. voor een uitvoeriger uiteenzetting van deze kritiek mijn artikel Transcendentale openheid. In: *Phil. Ref.* 35 (1970), p.25 - 56. Mijn kritische analyse van Dooyeweerd in dit artikel is bestreden door D.F.M. Strauss, Herbesinning oor die sin-karakter van die werkelijkheid by H. Dooyeweerd. In: *Phil. Ref.* 36 (1971), p.55 - 78, 155 - 183, en door W.J.

- Ouweneel, *De leer van de mens. Proeve van een christelijk-wijsgerige antropologie*. Amsterdam : Buijten & Schipperheijn, 1986, p.394v.
38. Vgl. H. G. Geertsema, *Reformatorische Wijsbegeerte de wereld rond*. In : *Beweging* 53 (1989), p.3 – 5.
39. Vgl. hoofdstuk 2.
40. この会議はヘルマン・ドーイヴェールト生誕百周年記念をも兼ねてオランダのフーフェンで開催され、北米の著名なキリスト教哲学者であるアルヴィン・プランティンガ（ノートルダム大学教授）やニコラス・ウォルターストルフ（イェール大学教授）も参加し講演した。筆者も参加して「ドーイヴェールト哲学と西田哲学」についての発題を行なった。

キリスト教と日本文化研究センター近況

当研究センターは日本におけるキリスト教文化創造を考究する学際的な研究機関として昨年スタートし、研究会が定期的に持たれています。

天田繫「音楽教育と日本文化」が新年最初の発表としてなされ、今年度はすでに、湊 晶子「キリスト教と女子教育」、新所員のネルソン・ジェニング「日本の神学：高倉徳太郎」、大和昌平「仏教と日本文化」の発表がなされ、活発な議論が交されました。

音楽教育と日本文化

天田 繫

我が国は、250年に亘る長い期間、鎖国という歴史上、例のない時代を刻み込んだ。突如として顕われた明治維新(1867年)はすべての分野においておくれた文明を一気にとり返すべく西洋文化を輸入した。そして音楽教育は明治20年東京音楽学校としてスタート。日本古来の邦楽は排除し洋楽一辺倒の様相を呈し、獨得な音楽文化を築いた。この教訓性に満ちた歴史の集積ともいべき現実から、私はこれ迄関わった教育で「戴冠ミサ曲はラテン語で、メサイアは日本語訳で」とした理由を解き、日本人の右脳と左脳との関係や文化創造を使命とする教会を確認しつつ、「すべての民に好意を持たれる教会」(使徒2:47)に秘められた重大なヒントをさがし求めたいと結んだ。



ニューエイジ

–古代異端の再来–¹

ピーター・ジョンズ²著
櫻井園郎訳

「ニューエイジ」は60年代の解放運動 (Liberation Movements) から芽を出した新しい宗教である。

自由、平等、靈性、環境問題および國際平和などに関する忍耐強くソフトタッチな推進運動によって、「ニューエイジは組織された宗教ではない」という印象を与えている。極めて多様な形態をとり、宗教や教会とは名乗らないことによってニューエイジは障害に遭うことなく拡大してきている。

キリストの福音がユダヤ教の枠を越え、ギリシャ・ローマの異教と対面したとき、2-3世紀の「キリスト教」指導者達の中にはキリスト教信仰をこれらの異教に適合させようとする傾向があった。その一つの結果として、キリスト教の歪曲であるキリスト教的グノーシス主義は大きな進展を遂げ、教会教父たちが魔的異端であると非難するに至った。

ニューエイジは、さしづめ、古代グノーシス主義の現代版であろう。ニューエイジのテレビ伝道者シャーリー・マックレーンがその著者『Going Within』の中で言及しているように、「キリスト教的グノーシス主義はニューエイジの知識を用いていた」。古代グノーシス主義と同様、ニューエイジは古代東洋の諸宗教にみられた神秘主義と古代ギリシャに由来する西洋の合理主義文化との融合であると言えよう。

古代グノーシス主義

ニューエイジは精神世界のスーパーマーケット的性格を有する。マインド・ボグリング (mind-boggling) : 精神記憶運動学 (soul memory kinesiology)、地球外生命との交信、占星術を用いたカウンセリング、ナリーナによるチャネリング (channeling by Narena)、前世回帰、深層組織的・瞑想的・両極的かつ反射学的マッサージ (deep tissue, meditative, polarity and reflexology massage) 等を挙げることができる³。このようなニューエイジの運動をどのように理解したらよいであろうか。

こうしたニューエイジの傾向は古代グノーシス主義と酷似している。古代アテネでは、人々はそれ自体の「奥義」と、靈術と、「グノーシス（知識）」において男女の祭司・導師から与えられるより良い生

の約束とを求めて、祭壇に向かっていた。グノーシス主義者達はその極めて豊かな多様性と、真理に至るための多様なアプローチを認める寛大さとを誇っていた。

同時に、グノーシス主義は聖書の創造主なる神を否定した。グノーシス主義者は、眞の神を不可知・非人格的な力、個々の諸要素の不統一の総体と考えていたからであった。神聖な存在は、両性具有、つまり、男女の区別の排除、によって特徴づけられていた。グノーシス主義者達は、自分が神聖なるもの一部であり、自分の中に王国を有しており、あらゆることが可能であり、人間の伝統や創造の秩序や神の法によっては何ら束縛されないと自覚したときに「救われ」る、と信じていたのである。

ニューエイジ

今やグノーシスの帝国が反撃してきている⁴。地球サミット、ホモ・セクシャル、フェミニズム、文化的・民族的相違の強調等にはニューエイジとなんらかの関係があると考えられるものもある。これらは、「この世の神」のイメージに作られた新しい人間性の創造を目標とする、首尾一貫した宗教的主張と深いところで関係している諸局面とも見ることができよう。

ニューエイジは聖書の創造神を排除する。極端な宗教的フェミニズムは女神である自然崇拜を推進しているが、この「地の女神」崇拜は聖書の創造論と抵触することは明らかである。そこでは人間は被造物ではなく、神との共同創造者であり、神のように自己の靈的実態を創造する者とされるのである。

グノーシス主義とニューエイジとは共通し、肉体は究極的には幻想にすぎないとして、輪廻を一般的に受容する。古代グノーシス主義と同様、ニューエイジの輪廻の目標も全体の中に融合されることである。

古代グノーシス主義と同様に、現代のニューエイジでも、女性原理が救済の鍵を握っている。

シャーリー・マックレーンによれば、人類は左脳的な知性を反映した男性的「陽」の時代から出て、右脳的な直感と神秘的靈性を持った女性エネルギーの「陰」の時代に移行しつつある、ことになる。現代の宗教的フェミニズムは両性具有の神のイメージへと傾きつつあるが、古代グノーシス主義も両性具有の神を有していた。

ニューエイジの靈術の中では、ヒンズー教の瞑想

術の採用が広まっている。この瞑想は、人の精神が人の朽ちる身体から独立し、宇宙の神と一体となるという、不朽性の感覚を人間に与えるものである。

教会のための視点

ノーマン・ガイスラー⁵は「ニューエイジは『本邦（アメリカ）で最も早い成長を遂げている信仰体系』である」と言う。フォーチューン500⁶にランクされている100以上の企業で社員の潜在的靈能力開発のためにニューエイジ・セミナーが利用されている。多くのヤッピーたち⁷の間ではヨガがエアロビクスに代わりつつあり、国連や、軍隊や、教会の中でのニューエイジ思想の進展も頻繁に報告されている。

ニューエイジは、多様性へ寛大な態度をとるゆえに、一つの靈的形式をとる聖書的キリスト教とは大いに対立する。あるポリティカリー・コレクト(PC)なインテリは、既に「キリストの福音は『性差別的、人種差別的、反ユダヤ的、総主教的、熱狂的愛国主義的、同性愛恐怖症的』である」と評している(Tal Brooke)。

正統的なキリスト教会は安逸を欲し、妥協を求める教職者ではなく、勇気のある指導者を必要としている。もし、私たちが今発言しないなら、今後発言したところで取り返しのつかないことになっていることは自明であろう！世界はかつてなかったほど、妥協の靈に従うことを拒絶する強い信仰者を必要としている。パウロが「終わりに言います。主にあって、その大能の力によって強められなさい。惡魔の策略に対して立ち向かうことができるために、神のすべての武具を身に着けなさい。」と私たちに奨めているとおりに(エペソ6：10－11)。

1. Peter Jones, "The New Age: An Old Heresy Revisited," in *New Horizons in the Orthodox Presbyterian Church*, Vol.16 No. 9 (October 1995). 発行者 (Committee of Christian Education of the Orthodox Presbyterian Church) の文書による許可を得て翻訳、転載。
2. カリフォルニア・ウェストミンスター神学校新約学教授。著書の一つに『The Gnostic Empire Strikes Back』がある。現在、旧約学のFutaro教授とともに同神学校の週末講座「Christians at Risk in the New Age」を提供している。
3. このリストの訳は便宜的な試訳。
4. この文句は著者の著書の一つのタイトルから出ているもの(『The Gnostic Empire Strikes Back』)。
5. ダラス神学校弁証学教授。著書に『Christian Apologetics (キリスト教弁証学)』『Introduction to Philosophy (哲学入門)』『Philosophy of Religion (宗教哲学)』『Ethics (倫理学)』『Miracles and Modern Thought (奇蹟と近代思想)』などがある。
6. 『Fortune』誌が毎年掲載する優良企業500社のこと。
7. Young Urban Professionalの略語YUPからの造語。都市に住む若いプロフェッショナル。

<新所員紹介>

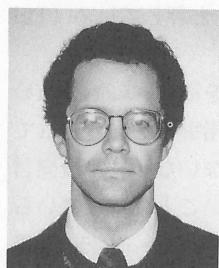
所員近況



増井志津代

①TCU助教授 ②アメリカ研究（文学、宗教史）③同志社大学文学部、ホイートン大学大学院（教会史MA）、マサチューセッツ大学アマースト校大学院（英文学MA）、ボスト

ン大学大学院（アメリカ研究、PhD）。マサチューセッツ大学アマースト校助手、四国学院大学文学部専任講師・助教授 ④ “Reading Hawthorne in the Context of the American Popular Religion” (Ann Arbor)、「ジョナサン=エドワーズ<パーソナルナラティブ>におけるペルソナ消失の問題」他。



ネルソン・ジェニング

①TCU講師 ②国際社会と日本、近代国際関係史 ③ヴァンダービルト大学、カベナント神学校 (MDiv) エディンバラ大学 (PhD)、日本宣教師 ④ “Theology in Japan :

Takakura Tokutaro, 1885 – 1934.” ⑤高倉徳太郎を中心に、明治・大正期日本におけるキリスト教受容の研究。



井上政己

① TCU講師 ②宗教改革史 ③同志社大学文学部英文学科、東京基督神学校 (MDiv)、カルヴィン神学校 (ThM)、アムステルダム・自由大学神学部博士課程 ⑤教会史、教理史、聖書

解釈史、ルネサンス文学、エラスムスとカルヴァン。

〈注〉 ①現職

②専攻、担当教科

③学歴・職歴

④主著

⑤研究テーマ

櫻井園郎：「教会の現代病」、「日本のクリスチャン、ここが弱い」、「現代に生きる日本人キリスト者のための使徒信条」(第1講「私は…」・第2講「信ず」刊行、第3講「全能の父なる神」を脱稿)。7-8月、カルビン神学大学院・トリニティ国際大学・クリスチャンヘリテージ大学・サイモン・グリーンリーフ法律大学院にて研究予定。

稻垣久和：宗教多元主義についての論文「純粹神人学における宗教と実在」(『思想のひろば』第6号、1996.1)、「滝沢克己とジョン・ヒック」(『比較思想』第22号、1996.3)に発表。9-12月はアムステルダム自由大学哲学部客員教授として滞欧予定。

木内伸嘉：3月からのサバティカルを用いてレビ記注解(2000年頃 Harper Collinsより出版予定)に取り組み中。

倉沢正則：6月中旬テクニーで開催されたアメリカ宣教学会及び宣教学教授連盟年会に参加。

湊 晶子：「新渡戸稻造と妻メリ」神奈川婦人会館にて講演。「エペソ人への手紙—今日的課題を見つめて」東京女子大学同窓会集中講義。

天田 繫：聖書カンタータの第二作「エステル記」より「死ぬべくば我死ぬべし」のコラールを作曲中。

ロバート・シェード：新約聖書ギリシア語における動詞の時制論、アスペクト論を研究中。

西岡 力：月刊「文芸春秋」6月号に、最近の北朝鮮の政治軍事情勢について論文を掲載。

* 定期講読ご希望の方は、研究所までご連絡下さい。

共立基督教研究所

「共立研究」

編集委員長 稲垣久和

編集者 小林高徳